The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中村明日美子作品における「結婚」表象の分析
Author(s)	東浦, 可奈
Citation	大阪大学言語文化学. 2024, 33, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97276
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中村明日美子作品における「結婚」表象の分析*

東浦　可奈**

キーワード：ジェンダー、表象、結婚

The comic artist NAKAMURA Asumiko debuted in Japan in the year 2000. Her published works defy classification into a single genre; they are not confined to shōjo manga (Japanese girls' comics) or Boys' Love (BL), nor can they be placed in any other category. This article discusses the representation of marriage in Nakamura's comic works. Specifically, she often portrays romantic relationships between men and describes such relationships as marriage. Current Japanese law does not permit homosexual marriage, and the term "marriage" invokes thoughts of family renewal registration and romantic love ideology. The two boys, the protagonists in these comics strive to find a way to be together in matrimony.

First, I analyze present-day BL culture. MIZOGUCHI Akiko's "evolved BL" refers to "BL works that motivate present-day readers to overcome homophobia, heterosexism, and misogyny." Second, with reference to family registration, I compare the actual situation of heterosexual common-law versus legal marriage, including the romantic love ideology, with its emphasis on marriage as connecting love, sex, and reproduction. Third, I consider criticisms of same-sex marriage as serving to reinforce gender norms and as generating discrimination against other sexual minorities. I analyze Nakamura's *Classmates* series (2008–2022) and *Double Mintz* (2013) as ways of practicing the re-reading of "marriage." Lastly, I propose reading Nakamura's works with reference to the logic of Eros in Plato's *Symposium*. Many fictional works belong to BL and other genres, such as a story set in an era when homosexual marriage is legal and same-sex human reproduction is possible biologically or artificially. However, Nakamura's story is set in our present-day society. The protagonists, a homosexual couple, think over their future as a couple. They started with the idea of "marriage," but as it was associated with adoption, they re-evaluate the meaning of "marriage" for themselves throughout the series and finally hold a wedding ceremony

---

* Analysis of Representation of "Marriage" in the Comic Work by NAKAMURA Asumiko（HIGASHIURA Kana）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

of their own design. I conclude that the philosophy underlying Nakamura's works and the way she has chosen to represent relevant social issues can provide support to overcome homophobia, heterosexism, misogyny, and other difficulties in today's society.

1 はじめに

中村明日美子は2000年に『マンガエフ』（太田出版）にて「コーヒー砂糖いり恋する窓辺」[1]でデビューし、ボーイズラブ（以下「BL」と略記[2]）や少女マンガなど多岐にわたるジャンルで作品を発表し続けている漫画家である。本論は、中村作品のうち、「同級生」シリーズ（2008-2022）[3]と『ダブルミンツ』（2009）という男性同士の恋愛関係[4]を描く作品を主な分析対象とし、中村作品における「結婚」表象の分析を行う。

中村は「BLだけでなく幅広いジャンルで、エロティシズムにおいてもモラルにおいても一切のタブーを持たずにチャレンジを続けている」（溝口, 2017: 42-43）と評されるように、「海のパイパイ」（2002）[5]ではカニバリズム、『鶏肉倶楽部』（2002a）では獣姦、『コペルニクスの呼吸』（2002-2003）ではBDSM[6]、『2週間のアバンチュール』（2008）では小児性愛、『薫りの継承』（2015）では近親相姦、が描かれている。このように多様な性愛のかたちを描く中村の作品において「結婚」という言葉や関係性がしばしば描かれる。現代の日本社会において「結婚」は男女間でのみ結ばれる法的に保障された婚姻関係が想起され、2023年現在の日本ではいまだ同性カップルが法的に婚姻関係を結ぶことはできず、「公益社団法人 MarriageForAllJapan – 結婚の自由をすべての人に」が「法律婚・事実婚（異性間）・同性カップルの比較」にて示すように、異性カップルと同性カップルとの間には格差がある[7]。これらを踏まえ、中村作品における法的には婚姻関係を結ぶことができないカップルの「結婚」表象を対象に分析していく。

---

[1]『鶏肉倶楽部』（2002a）所収。
[2]アルファベット表記では「Boys' Love」もしくは「Boy's Love」。
[3]続編である「ふたりぐらし」「佐条利人の父とその部下」が『OPERA』（茜新社）にて掲載されたが、2024年1月現在単行本化されていないため、本稿では『同級生』（2008）『卒業生―冬―』（2010）『卒業生―春―』（2010）『空と原』（2012）『O.B. 1』（2014）『O.B. 2』（2014）『blanc #1』（2020）『blanc #2』（2020）『home』（2022）の9冊を「同級生」シリーズとする。
[4]中村は異性間や女性同士の恋愛関係を主題とする作品も描くが、その中でも男性同士の恋愛関係を描いた作品が多い。女性同士の恋愛を描く作品としてはデビュー作「コーヒー砂糖いり恋する窓辺」、異性間のものは『ウツボラ』（2010）などがある。
[5]『鶏肉倶楽部』（2002a）所収。
[6]Bondage（拘束）、Discipline（調教）／Dominance（支配）、Submission（従属）／Sadism（サディズム）、Masochism（マゾヒズム）の略語。
[7]公益社団法人 MarriageForAllJapan - 結婚の自由をすべての人に（2023）.「どうして同性婚」. 結婚の自由をすべての人に - Marriage for All Japan -. https://www.marriageforall.jp/marriage-equality/.（参照2023-08-24）.

2「結婚」の意味するもの

「同級生」シリーズでは、主人公カップルが「結婚」についてくりかえし模索する。そこで作品分析に入る前に、現実の日本社会における「結婚」をめぐる議論を概観する。加藤秀一は、「結婚」という言葉の意味をめぐる論の中で、「ここ数年の芸能人の結婚発表を例にとってみれば、彼らの多くが結婚イコール『入籍』とみなす最近の慣行に忠実に従っている」（加藤, 2004: 56）と述べ、「かれらが『結婚』と呼ぶ出来事の実質は、どこかの自治体の役所に『婚姻届』という書類を提出し、それにもとづいて『戸籍』の書き換えが行われたということだけなのだ」（加藤, 2004: 57）と指摘する。これは法的な婚姻が可能な異性カップルにおける慣行であるが、日本社会全体において「結婚」とは、このように戸籍にかかわるものだという認識は確実に存在する。

一方で異性カップルには、戸籍の書き換えを行わない「事実婚」という「結婚」のあり方が存在する。現実の日本において、法的な婚姻関係を選ばずに「事実婚」を選択する異性カップルの背景には、女性が「嫁」という立場になることや出産を期待されるといった「家制度」への反発や、夫婦別姓のためなどといった理由があることが判明している（阪井・本多・松木, 2015）。また、事実婚の当事者は、法的な婚姻と「事実婚」の違いは書類に関するものでしかなく、自身たちの関係を法的な婚姻関係にある夫婦と変わらない「夫婦」であり、「家族」であると考えており、したがって「事実婚」と「同棲」は全く違うという主張が見受けられる（同上）。くわえて「事実婚」や「結婚」という言葉以外に、当事者が使いたい既存の言葉がないという問題もあげられ、以下のように述べられている。

> 事実婚経験者は、親密で持続的な関係を「結婚」という語彙で語っている。（･･･）事実婚を実践する人が自らの関係を「結婚」と語る際に起きていることは、結婚の否定というよりは、「結婚の読みかえ」だともいえる。参照点としている「結婚」を読みかえることで、「事実婚」を「結婚」に位置づける。その意味で、事実婚という実践は何らかのかたちで「結婚」であることを認識しつつ、その「結婚」の枠組みに変更を迫るものである。事実婚は、「結婚」が決して固定的・画一的なカテゴリーではないことを示す実践だともいえるのである。（阪井・本多・松木, 2015: 83-84）（傍点は引用者による）

このように、現実の異性カップルの事実婚が、「結婚」や「家族」が指し示す内容や関係性に変更を迫る実践となることが示され、法的な婚姻を選択できるカップルがそれを選択しないことでうまれる「結婚の読みかえ」作業の意義について考察されている（阪

井・本多・松木, 2015)。

また、千田有紀（2011）は近代家族の規範として、夫婦間の絆の規範としてのロマンティックラブ・イデオロギー、母子間の絆の規範として母性イデオロギー、家族の集団性の規範として家庭イデオロギーの３つをおおまかな分類としている。ロマンティックラブ・イデオロギーとは、「愛と性と生殖とが結婚を媒介とすることによって一体化されたもの」（千田, 2011: 16）である。一方で、ロマンティックラブ・イデオロギーを含む、「結婚」における性愛規範性を批判するエリザベス・ブレイク（2012=2019）は、成人間のケア関係の法的枠組みとして「最小結婚（minimal marriage）」[8] を提唱する。「最小結婚」に関して、ブレイクは以下のように述べる。

> 結婚に対するいかなる追加的な制約（性別、ジェンダー、当事者の人数、性愛関係、相互に背負う権利）も許されてはならないことを含意している。最小結婚によって、これまで結婚という形でしか相互に背負うことのできなかった権利と責任を選択できるようになり、たった一人の愛するパートナーとだけでなく、望む人ならば誰とでも権利と責任を取り交わすことができるようになる。（ブレイク, 2012=2019: 266）

また、ブレイクは、自由の中立性と公共的理由に関連づけられてきた同性婚擁護論について、「結婚の中立性の意味を吟味する場合には決して十分とは言えない」（同上）としている。さらに、法制度としての同性婚の合法化については、青山薫（2016）が述べるように同性婚が合法化されることで既存の性規範が再強化され、さらなるマイノリティへの抑圧や差別が強化される危険性や、堀江有里（2010）が述べるようなセクシュアリティをめぐる階層秩序を生み出す危険性が挙げられる。志田哲之（2022）は、同性婚や同性パートナーシップ制度といった制度の確立へ向けた現状について以下のように述べる。

> 異性愛者が築いてきた核家族のようなものを目指していると思われ、つまり異性愛規範的な家族のあり方への同化が進んでいると理解する方が容易である。（･･･）カップル関係の制度化要求にあたって、かけ声としては「多様性」が声高に行われているものの、その内実は結婚し、子どもをもつ生き方が幸福とい

[8]「最小結婚」とは「法的規則を最小化する婚姻法」（ブレイク, 2012=2019: 267）であり、ブレイクは「リベラルな国家は、その関係がケア関係であること以外には、性別又は配偶者の数や、関係性の性質や目的にいかなる原則的な制約を設けることはできない」（同上 : 269）と主張する。

> う「一様性」に向かっており、性や生の「不自由さ」が示されているのではないだろうか。（志田, 2022: 104）

同性婚が合法化された世界観で展開されるBL作品も多く存在するが、そのような世界における同性カップルの「結婚」を描くことは上記と同様の問題が生じうる。

また、本稿での分析対象作品はBL文化に含まれるものだが、溝口彰子が「プロのBL作家は九九パーセント以上が女性であり、編集者は九〇パーセント以上が女性だ。読者（消費者）も九九パーセント以上が女性だろう」（溝口, 2015: 20）と述べるように、BL文化とは作り手も読み手も女性がマジョリティとされる文化である。その点で同性愛者の当事者の文化とも異なる性質を持つ。

さらに、ブレイクが「最小結婚」を提唱する際、あえて「結婚」という法的枠組で呼ぶ理由を以下のように述べる。

> 用語こそが重要なのだ。同性ユニオンを「結婚」と呼ぶことへの政治的抵抗は、しばしば同性ユニオンが完全に正統なものであることを否定し、異性間パートナーシップの特権的地位を保持することを企図していた。「結婚」の適用範囲を拡張することは、過去の性愛規範的で異性愛主義的な差別を是正するための一つの方法なのだ。（ブレイク, 2012=2019: 309-310）

「結婚」という言葉によって連想される事象や、同性婚の合法化がはらむ問題に関する現状を踏まえると、BL作品における男性同性カップルの「結婚」の表象によって「一様性」へと向かう危険性を無視することはできない。しかし、現実と同様に戸籍上の「結婚」ができない男性同性カップルの物語において、「結婚」が意味する内容について考えさせる描写を経て、男性同性カップルの「結婚」が描かれたことは、「結婚」が決して固定的・画一的なカテゴリーではないことを示す実践、すなわち「結婚の読みかえ」の可能性を探ることにつながると考える。

3 BL作品における「結婚」

男性同性愛物語を扱う文化として最も認知されているもののひとつであるBL文化は半世紀以上の歴史を持っており、BL研究も多様な分野で行われてきた。西原麻里は「＜家族＞を目指すBLマンガ」と称した結婚と子育てを含むBL作品の分析を通して「男性カップルの関係を＜家族＞にする要素として大きな役割を果たしているもの、それが子どもの存在であると考えられる」（西原, 2012: 33）と論じた一方で、子どもの存在を

必要としない「結婚」については論じていない。また、溝口は「二〇〇〇年代になって増加したホモフォビアや異性愛規範やミソジニーを克服する手がかりを与えてくれるBL」（溝口, 2015: 55）を「進化形BL」と呼び、中村の「同級生」シリーズ[9]を「進化形BL」の作品として分析した。溝口（2015）はシリーズ第3作の『卒業生―春―』において、高校三年生の主人公二人が卒業式当日の教室で「結婚」の約束を交わす場面について以下のように分析する。

> ふたりは式をサボって、出会った二年の時の教室で「好き」「結婚して」といいあってセックスをする。（･･･）恋愛の成就が「結婚」という言葉で、結婚式のシーンではないもののそれを想起させる誓いのキスのシーンでしめくくるというのは、ガールミーツボーイものの少女マンガの超王道だ。（･･･）それらのジャンルの定型を採用しつつも、現実的な社会のなかでゲイとして生きていくことを覚悟した主人公ふたりを描くことを両立させている。（溝口, 2015: 196）

『卒業生―春―』では「結婚」の約束をするにとどまったが、続編となる『blanc #1』および『blanc #2』では「結婚」の内容について悩む二人の姿が描かれる。次節では二人が「結婚」の内容について悩み、その過程における困難を乗り越え、二人にとっての「結婚」が導かれるまでを具体的に分析していく。

4「結婚」の再検討―「同級生」シリーズ―

中村明日美子『同級生』から始まる「同級生」シリーズは、最新刊の『home』でシリーズ9冊目になる長期連載作品である。「まじめにゆっくり恋をしよう」（中村, 2008: 185）、というテーマで始まったこの作品は、『同級生』で高校二年生の草壁光と佐条利人が出会い、シリーズ第8作『blanc #2』（2020）では20歳の彼らが結婚式を挙げ、シリーズ第9作『home』（2022）で初めての同居かつ新婚生活が始まるところまでが描かれている。シリーズ第3作の『卒業生―春―』では京都大学薬学部に合格した佐条の大学院への進学の可能性や、音楽関係の仕事に就きたいと思う草壁の事情を踏まえ、京都と東京の長期間の遠距離恋愛を覚悟した二人は、20歳になったら「結婚」しようと、高校の卒業式の日に約束する（中村. 2008: 161-171）。しかし、20歳の誕生日に指輪を贈り合った二人は、シリーズ第7作『blanc #1』（2020）では、草壁が養子縁組を延期しようと言ったことや[10]、佐条が距離を置こうと言ったことにより（中村, 2020a: 38）、一度別れるこ

[9] 溝口は2015年当時、『同級生』（2008）から『O.B. 2』（2014）までの計6冊を分析対象としていた。
[10]『blanc #1』では養子縁組が延期になったことは抽象的に表現されており、『blanc #2』の、佐条が草壁

とになる。

佐条と出会うまでは女性との恋愛しか経験のなかった草壁にとって、「結婚＝戸籍に関するもの」という考えや、実際に同性カップルの「結婚」の方法として養子縁組が利用されていることから、卒業式の日の約束が「結婚＝養子縁組」をしよう、という内容になることは想像可能である。一方で、現行の法制度では、一度養子縁組を結んだ相手とはそれ以後、婚姻関係になることはできず[11]、佐条もそれを理解していることが描かれる（中村, 2020a: 63-70）。当初、最終巻の予定で書かれた『卒業生―春―』にて[12]、高校生三年生の草壁は、将来的に養子縁組を利用して佐条と「結婚」したいと考えていた（中村, 2010b: 76-78）が、二人は「結婚」に対する考え方の違いをきっかけに一度ケンカする。また、『blanc #1』で草壁と距離をおいた佐条は、同性カップルであるというマイノリティ意識から、「結婚」することで草壁の人生を巻き込んでしまうことを恐れ、草壁との関係を諦めようとする（中村, 2020a: 73）。それに対して、女性の友人である宮村まやは涙を流しながら「でもそういうもんちゃうの結婚するて」（同上 : 74）と、佐条に草壁の人生を巻き込むことを恐れないよう意見する。その後の『blanc #2』にて、佐条の母親が亡くなった際、佐条は自身の父親に佐条と草壁が恋人同士であることをカミングアウトするが、父親は拒絶的な反応を示す。

> 「お前はおかしいぞ／おかしくなった！いつからだ!?（･･･）･･･君のせいか･･･？／そんな･･･髪もチャラチャラヘンな色にのばして･･･／まともじゃないだろう／君か／君のせいで利人は変態･･･」「うるさい黙れ!!」（中村, 2020b: 84-85）

ゲイであることを自覚してから母親を裏切っていると感じていたが、母親に草壁を恋人として紹介して受け入れられてからは再び母親の目を見て話ができるようになった佐条が、亡くなった母親の前で父親の言動に強く反発する姿は、佐条が内面化していたマイノリティ意識とそれに付随するホモフォビアへの決別とも捉えられる。周囲に隠れて付き合うのとは異なり、「結婚」と称して二人の関係をカミングアウトすることは、性的マイノリティであることを引き受けることになる。前述した事実婚の異性カップルに

に対して言った「籍を一緒にするの延期しようって言われたとき／あの日の約束が／なかったことにされたような気がしたんだ」（中村, 2020b: 108-109）というセリフで二人が交わした会話の内容がはじめて明らかになる。

[11]「（養親子等の間の婚姻の禁止）第七百三十六条　養子若しくはその配偶者又は養子の直系卑属若しくはその配偶者と養親又はその直系尊属との間では、第七百二十九条の規定により親族関係が終了した後でも、婚姻をすることができない」民法 | e-Gov法令検索　https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=129AC0000000089（参照 2023-09-14）

[12]『卒業生―春―』の単行本の裏表紙に「ゆれる青春時代の思い出を綴った人気シリーズ遂に完結！」と書かれている。

よる「結婚の読みかえ」作業（阪井・本多・松木, 2015）を行なうためには、草壁と佐条の場合はホモセクシュアルについても公表することになるのだ。

草壁は、頭髪を短く刈った姿で佐条の母親の葬式に来る。その姿を見た佐条は別れを告げた理由を話す。

> 「籍を一緒にするの延期しようって言われたとき／あの日の約束（＝卒業式の日の『結婚』の約束※引用者注）が／なかったことにされたような気がしたんだ／それだけなんだ／それだけのことで／僕は･･･」（中村, 2020b: 108-110）

その直後、草壁は佐条の父親の前で「僕たち結婚します」（同上 : 115）と宣言する。これらの場面では、髪型という外見が変わっても草壁の内面が変わらないことと、養子縁組という形式をとらなくなっても、「結婚」しようとする二人の関係の内容および性質までは変わらないことがパラレルに描かれている。「結婚」とは「籍を一緒にすること」だと無意識のうちに思っていた佐条が、籍を入れるのを延期されたことで「結婚」の中身である二人の関係まで変わってしまったと感じたことが描かれる。その後、草壁に再び「結婚しよう」と言われた際、佐条と草壁は以下のように話す。

> 「どうやって？どういうかたちで？／･･･僕もいろいろ考えたけど･･･／人によってそれぞれだし･･･／いろんなかたちがあって･･･／何が正解かわからないし 何が／自分に･･･／自分たちにぴったりくるのかわからない」「結婚式しようよ」（中村, 2020b: 125-127）

草壁は、佐条と同じ名字になることや同じ墓に入ることも悪くはないが「マストじゃない」とし、友人やお世話になった人や家族といった、来てもらいたい人を呼んで「愛し合っている二人ですよというおひろめ」をしたいと言う（同上 : 130-135）。草壁と佐条にとって、「結婚」とは必ずしも戸籍の書き換えを伴うものではないということがここで示される。

中村は『blanc #2』のあとがきにて「彼らはここで一緒になった。（･･･）ゆっくりと近づいていた2人がひとつになったことを幸せと感じていただけたら嬉しいです」（中村, 2020b: 212-213）と綴る。中村は「結婚した」とは書かず、「彼らはここで一緒になった」と表現する。草壁と佐条は、戸籍の上で「一緒になること」を選ばなかった。草壁と佐条が二人なりの「結婚」の形として結婚式をしようと決めてから、草壁は自身の父親に佐条との「結婚」を報告する際に「一緒になりたい人がいる」（同上 : 146）と言い、以

後も「結婚」という言葉ではなく「一緒になる」という言い方をする。式場まで来たものの結婚式に出席しなかった自身の父親に対して佐条が「ごめんなさい」（同上 : 194）と言ったことに対して、その後の佐条と草壁は以下のように話す。

> 「あやまりたくなかったんだ本当に／なのに／ごめん・・・・・・」（・・・）「なんかうれしかったよ／（・・・）俺のこともひっくるめてあやまってるっていうか／自分のことも俺のことも一緒なんだなって／ああ 一緒になったんだなって」「ポジティブ・・・」（中村, 2020b: 198-201）

その後、佐条は父親に「ありがとうって言えなくてごめん／ごめんばかり言うのももうやめる／ありがとう／僕は／僕はしあわせです」（同上 : 205-210）というメールを送るところでこの巻は終わる。

「結婚」という言葉は「戸籍を書き換える」作業を想起させ、「ごめんなさい」という言葉にはネガティブなイメージが付随する。佐条が、自身の感情や思考を既存の「結婚」という概念を通しては、うまく表現しきれずに模索している様子が、引用内で「結婚」ではなく「一緒になる」という言葉を選択するように変化した点から読み取れる。「一緒になる」という言葉は多くの恋愛作品で頻繁に用いられるありふれた言葉であることは間違いない。しかし、ここにはとるべき形がわからない苦悩を経験しながらも、二人の関係を言語化しようとする試みが表れている。結果的にありふれた言葉となっている点は、阪井・本多・松木（2015）が示すように、当事者が使いたい既存の言葉がないという現状を表しているとも捉えられる。一方で、マンガ作品であることにより、描かれているものから読み取れる情報もある。マンガという表現方法の有用性については次章にて論じる。

その後、父親へのメールで「ごめん」という言葉が「ありがとう」へと変わり、「僕はしあわせです」というメッセージで締めくくられる点から、同性カップルが共に生きることに対するネガティブなイメージを払拭しようとする佐条の姿勢が読み取れる。阪井・本多・松木（2015）が主張する「結婚の読みかえ」と同様の試みが、法的な婚姻という選択肢がない同性カップルが主人公の本作で行なわれているといえる。

『卒業生―春―』にて草壁が養子縁組を伴う「結婚」を提案したことも、同性カップルたちにとっての「一様性」から来たものだと考えられる。このような「結婚」の認識を詳細に掘り下げ、再検討した本作は、同性婚が合法化されていない社会における法令上の「不自由さ」が存在することは想像できるものの、「一様性」に向かうのみではない「結婚」の実践を描いたといえるのではないだろうか。

5「一つになる」というエロス―『ダブルミンツ』―

本節では「同級生」シリーズにて用いられた「一緒になる」もしくは「一つになる」という言葉が中村の他作品ではどのような文脈で用いられているのかについて論じる。

『ダブルミンツ』では壱河光夫（以下「攻ミツオ」）と市川光央（以下、「受みつお」）という名前の音は全く同じ二人の「イチカワミツオ」が主人公カップルである[13]。高校時代に出会った二人だったが、攻ミツオは受みつおにいじめられていた。そして社会人になって突然の受みつおからの連絡は「女を殺した」というものだった。再会した二人は肉体関係を持つようになるが、「愛してる」や「好きだ」といった愛の言葉を発することはない。

この物語にはプラトンの『饗宴』においてアリストファネスが語った球体の姿をした太古の人間についての物語[14]が、おそらく攻ミツオのみに聞こえているだろうテレビ番組の音声として挿入される（中村, 2009: 98, 101, 126-127, 130）。しかし、その最後は「人間はその失われた半身を焦がれ求めるといわれています／これがいわゆる･･･」（同上 : 128）と途切れて終わる。この音声に続くと考えられる言葉としては「ベターハーフ」や「エロス」が挙げられるが、どちらもこの作品には登場しない言葉である。そして、攻ミツオはこの物語を受みつおに話す。

> 昔　人間には三つの種類があって／男性と女性と球体をした両性がいたんだって／両性は力強く傲慢だったので神々の怒りを買い･･･／その身体を二つに分けられてしまったんだって／きっと俺とみつおくんは同じ一つの身体だったんだ／それが分かれてしまっていたんだ（同上 : 154-155）

攻ミツオが語り直す太古の人間の物語にもやはり「ベターハーフ」や「エロス」といった既存の言葉は出てこない。受みつおは、この物語がエロスを賛美するための演説の一部であるという前提や、誰がいつ語ったものなのかもわからない状況で、「ミツオとみつおは一つだった」という攻ミツオの物語を聞かされ、内心で「二つに分かれてたのが

---

[13] 同名であることからの混乱回避のため、セックス時の役割を示すBL用語「攻」と「受」を表記する。また、プラトンが言うところの「愛する人」（プラトン, 中澤訳, 2013: 40）が「攻」であり、「少年」（同上）が「受」と理解することも部分的には可能だと考える。

[14] プラトン『饗宴』にて、宴会にて参加者が順番に愛の神エロスを賛美していく中で、アテネの喜劇詩人アリストファネスは、太古の人間には男性と女性とアンドロギュノスと呼ばれる第三の性別があったが第三の性は消滅してしまったこと、人間の体は球体をしていて、背中も脇腹も丸く、手足は4本ずつあり、首の上にはうりふたつの顔が2つ、耳は4つ、生殖器は2つ、それが太古の人間の姿であったと語る。太古の人間たちは力が強く、元気があったために神に体をまっぷたつに分断されてしまい、誰もが自分の半身を恋しがり、自分の半身と一緒にいた。このとき以来、人間の中に、互いを求め合うエロスが生まれた、とアリストファネスは語る。

一つになって／どうなるんだ（･･･）どこに行くんだよ／どこに行けるんだよ俺たちは」（同上 : 156）と思う。この受みつおの内心の言葉は、本稿第 4 章で示した「同級生」シリーズの佐条の心情と重なる。佐条の母親の葬式後、あらためて「結婚しよう」（中村, 2020b: 125）と草壁に言われた佐条は頬を染めながら一度目を見開くが（図 1）（同上 : 125）、その後に目をほそめて「どうやって？どういうかたちで？（･･･）人によってそれぞれだし･･･／いろんなかたちがあって･･･／何が正解かわからないし 何が／自分に･･･／自分たちにぴったりくるのかわからない」（同上 : 126）と言う佐条の視線は明らかに下がっている（図 2）（同上 : 128）。しかし草壁が「結婚式しようよ」と言って佐条の顔を下からのぞき込むように見つめることで佐条の目も再び大きく開かれる（図 3）（同上 : 128）。

図 1　「結婚しよう」と佐条の反応

図 2　視線が下がる佐条

そして「同級生」シリーズでも用いられている「結婚」を読みかえた結果として登場する言葉と同様に「一つになる」という表現が本作でも用いられている。くわえて、本作の主人公カップルが「イチカワミツオ」という同じ音の名前であることや、「同級生」シリーズの主人公カップルである草壁光と佐条利人の名前についても、主人公たちの担任教師である原先生が「ドイツ語で『光』だろ／『Licht』」（中村, 2008: 84）と指摘し、草壁の父親が「うちの光と同じ名前だ」（中村, 2020b: 144）と言うように、同じ意味を持つ名前であることにも注目したい。

『饗宴』において太古の人間について語られた後に、「俺たち人間は一つの全体であった（･･･）この全体性への欲求と追究をあらわす言葉こそ＜エロス＞なのだ」（プラトン, 中澤訳, 2013: 88）と述べられる。今道友信は『饗宴』におけるエロスについて、「それ

自身儚い有限的存在としての人間が、真に美しく善いものを憧れ、それと一つになろうとする永遠の悲願」（今道, 1972: 63）と述べる。さらに、今道は愛の性質について以下のように述べる。

図３　佐条をのぞき込む草壁

> 愛は合一であり、和合である。そのことは確かである。しかし、愛ほど争いの基になり、罪や滅びの原因となったものがあるであろうか。（･･･）他人に譲ることのできないほど、強く合一を求め、激しく独占しようとする憧れの思いこそ、愛がやさしいひたむきな美しさを持つものであるにも拘らず、己れの憧れを阻む者に対する激しい敵意とねたみを生み、争いや罪をも呼ぶ原因となる所以なのである。愛する者同士にとっては、二つのものが一つになることのみが問題なのであって、三つ目以下はこの夢みる和合の世界にとって無用のものにほかならない。（今道, 1972: 65-66）（傍点は引用者による）

このような愛の性質を説明するかのように、受みつおと攻ミツオが再会するきっかけは受みつおの「女を殺した」というセリフである。また、作中には受みつおと攻ミツオ以外の「三つ目以下」の存在も複数登場する。攻ミツオは高校時代の自身の彼女や受みつおが「殺した」女性と、受みつおは攻ミツオの当時の彼女や受みつおが「殺した」女性と、そして繋がりのある暴力団員の男性たちと、肉体関係をもったことが描かれる。このような「三つ目以下」の人間を捨て、受みつおと繋がりのある暴力団員が用意した二人分の中国国籍のパスポートを得るために、二人は日本を出る。そして、その船上で受みつおは攻ミツオに「お前俺と死ねるか？」（中村, 2009: 169）と問う。作中で語られるアンドロギュノスの談話が記されている『饗宴』においては、「誰かのために喜んで死ねるのは、愛する人たちだけ」だと述べられており（プラトン, 中澤訳, 2013: 43）、その考えに従えば、受みつおから攻ミツオへの「死ねるか？」という問いは、「愛せるか？」と解釈できる。また、このシーンでは、中村は１ページの約三分の二を横割りで３コマに分け、段々と涙が滲む攻ミツオの表情を描き、最後に白い背景に「･･･うん･･･」（図４）（同上 : 170）と答える攻ミツオのセリフでこの物語を締めくくっている（中村, 2009:

170)。BL研究者の溝口彰子との対談において中村明日美子が、コマ割りの効果について触れ、「タテだと緊張感が出る。ヨコだと、ゆるむ」(溝口, 2017: 72) と述べているように、緊張が走るシーンに用いられる縦割りとは異なり、ここでも横割りのコマは弛緩を表現している。「争いや罪をも呼ぶ原因」としての愛の性質が描かれていることや、このコマ割りと攻ミツオの緩んだ泣き顔からも、受みつおの「お前俺と死ねるか？」という攻ミツオへのセリフは、「結婚」から派生した「一つになろう」という言葉からさらに派生した、この作品における愛の言葉となっていると考えられる。とるべき形がわからない苦悩を経験しながらも、両者の関係性や絆を確認する言葉が模索され、マンガという表現技法が言葉を補完する情報となっているのである。中村の作品における「結婚」表象を分析することで、言葉だけではなく、マンガという表現方法の有用性を確認した。

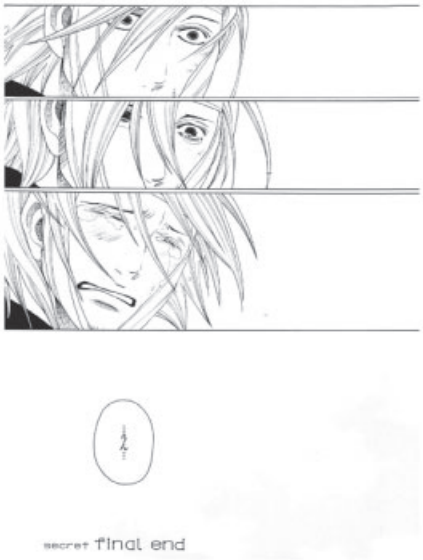

図4　連続する横割りコマ

6 結論

現実の日本社会における「結婚」は戸籍の書き換えを慣行とするものであり、戸籍上の「結婚」は同性カップルには認められていない。また、「事実婚」を選択する異性カップルにとっては、「結婚」や「事実婚」という言葉以外に当事者が適切だと思う言葉が存在せず、「結婚の読みかえ」を実践し、「結婚」の枠組みに変更を迫ろうとしている。

このような現状で、男性同性愛を作品の主題とするBL文化は、「＜家族＞を目指すBL」や「進化形BL」といった、ホモフォビア・異性愛規範・ミソジニーを克服する作品が創作される文化として発展してきた。「同級生」シリーズでは、口頭での「結婚」の約束から、具体的な「結婚」の内容を検討することで「一つになる」という言い換えがなされた。「結婚」という言葉には異性愛規範的な家族のあり方への同化のリスクがあることを踏まえると、そのような「一様性」に向かわない作品は「結婚の読みかえ」、すなわち「結婚」の枠組みに変更を迫る実践たりうる。また、「同級生」シリーズの主人公カップルの「結婚」観の変遷は、シリーズ第3作『卒業生―春―』にて同性カップルであるがゆえの養子縁組という戸籍の書き換えという具体的なイメージから、「結婚」

という抽象的な表現に戻り、シリーズ第7作『blanc #1』では戸籍の書き換えを保留する。そして彼らは最終的に戸籍の書き換えといった形式的なものではなく、「愛し合ってる二人ですよ」という「おひろめ」を行うことで「結婚」とした（中村, 2020b: 132）。このようにシリーズを通して、主人公カップルの「結婚」への意識の変化が見られる。さらに、シリーズ第4作『空と原』（2012）で登場したゲイカップルのうちの一人である響が結婚式を終えた佐条に「俺もパートナーが男なんですけど／今までその‥‥‥／結婚式とか招ばれても自分とは関係ないものだなって／思ってたんですけど／でも／今日／そんなことないんだなって思いました／おめでとうございます」（中村, 2020b: 183-184）と打ち明ける場面がある。作品内では草壁と佐条が「結婚式」を行なったことで同じ世界の男性カップルに変化を与えた。本稿の分析対象作品は「ホモフォビアや異性愛規範やミソジニーを克服する手がかりを与えてくれるBL」（溝口, 2015: 55）であり、「同級生」シリーズは、「結婚」が決して固定的・画一的なカテゴリーではないことを示す実践と考えられる。

そして、『ダブルミンツ』ではプラトンの『饗宴』にてアリストファネスが語った太古の人間の物語やプラトンのエロス論を援用し、「結婚」や「愛」といった言葉を用いることなく「一つになる」ことを欲望する二人の人間が描かれていることを分析した。『ダブルミンツ』においては「俺と死ねるか？」が「一つになる」意志、つまり「結婚」する意志を確認する言葉であったことは、言葉だけでなく同時にマンガ表現からも読み取れるものであった。

したがって、このような中村の作品における「結婚」とは、「結婚の読みかえ」という変革の可能性を内包した表象である。

参考文献

青山薫「『愛こそすべて』――同性婚／パートナーシップ制度と『善き市民』の拡大」、『ジェンダー史学』、12号、2016年、pp.19-36。

今道友信『愛について』講談社、1972年。

加藤秀一『＜恋愛結婚＞は何をもたらしたか 性道徳と優生思想の百年間』筑摩書房、2004年。

阪井裕一郎・本多真隆・松木洋人「事実婚カップルはなぜ「結婚」するのか：――結婚をめぐる差異化と同一化の語りから――」『年報社会学論集』、28号、関東社会学会、2015年、pp.76-87。

阪井裕一郎「第6章　婚姻制度の廃止か、改革か？――パートナー関係への国家介入について」、植村恒一郎・横田祐美子・深海菊絵・岡野八代・志田哲之・阪井裕一郎・

久保田裕之『結婚の自由――「最小結婚」から考える』白澤社、2022 年、pp.193-219。
志田哲之「第四章　忘れられた欲望と生存　同性婚がおきざりにするもの」、菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタアディーズをひらく　2　結婚，家族，労働』晃洋書房、2022 年、pp.102-133。
千田有紀『日本型近代家族 どこから来てどこへ行くのか』勁草書房、2011 年。
中村明日美子『鶏肉倶楽部』太田出版、2002a 年。
中村明日美子『中村明日美子コレクションⅠ　コペルニクスの呼吸 1』太田出版、2015 ＝ 2002b 年。
中村明日美子『中村明日美子コレクションⅡ　コペルニクスの呼吸 2』太田出版、2015b ＝ 2003 年。
中村明日美子『中村明日美子コレクションⅧ　2 週間のアバンチュール』太田出版、2015c ＝ 2004 年。
中村明日美子『同級生』茜新社、2008 年。
中村明日美子『ダブルミンツ』茜新社、2009 年。
中村明日美子『卒業生―冬―』茜新社、2010a 年。
中村明日美子『卒業生―春―』茜新社、2010b 年。
中村明日美子『空と原』茜新社、2012 年。
中村明日美子『O.B. 1』茜新社、2014a 年。
中村明日美子『O.B. 2』茜新社、2014b 年。
中村明日美子『blanc #1』茜新社、2020a 年。
中村明日美子『blanc #2』茜新社、2020b 年。
中村明日美子『home』茜新社、2022 年。
プラトン、中澤務訳『饗宴』光文社、2013 年。
西原麻里「＜家族＞を目指す BL マンガ」、甲南女子大学女子学研究会編『女子学研究』、2 号、甲南女子大学女子学研究会、2012 年、pp.24-39。
堀江有里「同性間の＜婚姻＞に関する批判的考察」、『社会システム研究』、21 号、2010 年、pp.37-57。
溝口彰子『BL 進化論 ボーイズラブが社会を動かす』太田出版、2015 年。
溝口彰子『BL 進化論［対話篇］ボーイズラブが生まれる場所』宙出版、2017 年。
Brake, Elizabeth. *Minimizing Marriage: Marriage, Morality, and the Law*（*Studies in Feminist Philosophy*）, Oxford University Press, Inc. 2012.（久保田裕之監訳『最小の結婚　結婚をめぐる法と道徳』白澤社、2019 年。）